

ざいちのち

まちやむら、そこに住む人びと(ざいち)の、
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。

実践型地域研究ニューズレター No.33 2011年7月



京都大学

学際融合教育研究推進センター・生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

亀岡市

京都学園大学周辺に広がる農村

亀岡フィールドステーション

土地に暮らすということ

— 今、福島について考える —

亀岡 FS 大西信弘

福島の事故から、既に3ヵ月以上が過ぎているが、未だに、先行きが見えない事態が続いている。被災地の状況を見るにつけ、土地に暮らしてきたことは、そうたやすくは変えることができないのかと考えさせられる。25年前に事故が起きたチェルノブイリでも、放射能の汚染地域で、暮らし続けることを選択している人たちがいるという。土地に住まい、土地を守り続けるという暮らしが、地域の中での生活、生業と「ざいちのち」のセットを生み出してきたのだろう。それは祖先から受け継いだ、かけがえの無い「暮らし」そのものなのではないだろうか。

このように考えるようになったのは、自分の暮らしには「ざいち」という感覚が希薄だと感じるようになったからだ。私の父も、祖父も、技術者で、職場に応じて各地を転々とした。祖父は広島県の呉で造船技師集団の頭領のような立場にあった。その後、岡山県の玉野の造船所に移り、父も叔父も技師となった。父は、結婚を機に上京し、技術者として他の会社に勤めていた。私が小さい頃は、東京都の三鷹市に職場があったが、工場が移転し、晩年は埼玉県の上尾市で勤務していた。住まいは、職場に近いところを会社が借り上げたり、社員寮に入ったりして、父は、結局、生涯土地を持たず、仕事や生活の便に応じて、住まいを移るとい暮らし方をしてきた。定住の地を持たない都市移民の暮らしには「ざいち」の感覚は希薄かもしれない。

さて、原発事故直後、身近な友人たちに関西への緊急避難を呼びかけた。関西に縁故がある友人たちは、妻子を実家に避難させたり、関東にいる相方を自宅に呼び寄せたりしていた。少なからぬ人たちが避難してきているようだ。中学時代からの東京の友人に一時的な緊急避難を提案した。彼自身は、今回の事態にたいへんな危機を感じていた。彼の両親は「逃げるなら一人で逃げなさい」と言い、家庭内は陰悪な雰囲気にな

ったという。彼の一族は、生え抜きの東京人で、両親とその兄弟たちが東京に生活しており、一族全員避難というのは非現実的だったようだ。友人一族は、農林水産業といった、土地の恵みで暮らしている訳ではないにも関わらず、暮らす土地を移すことというのは、たやすくはないことを示している。土地が生み出す恵みを生業にして暮らしている人たちならば、なおさらそれはむずかしいだろう。

原発の事故は、被曝自体、取り返しのつかないことであるのだが、汚染によって、土地に入れなくなり、水が飲めなくなるなど、それまでの「ざいちの暮らし」を一瞬にして、奪ってしまう。ざいちの暮らしを失った人たちの気持ちを思いやることができるのは、ざいちの暮らしをしている地域なのではないだろうか。ざいちの暮らしというキーワードで地域が連携できるようなネットワークに活路を求めることができないだろうか。

大人たちの避難は、思うより難しいかもしれないが、大人よりも放射線に対する感受性の高い子どもたちを一時避難させることは、緊急の課題である。「避難なんて大げさな」などと言う人もおり、大人ですら、避難すべきかどうかについての判断は難しい。しかし、被災地では、既に被曝が原因であると考えられる下痢などの症状が出始めているという報告もある。国や自治体、そして当事者の東電は、子どもたちの未来のために、地元自治体、大学やNPOなどによびかけ、「ざいちの暮らし」が今も息づく農村地域をコアとして、まずは一時的でかまわないから、避難を実現してほしい。私たちも協力をおしみません。



野仏への祈り
(2006年12月亀岡市大井町、安藤撮影)

守山フィールドステーション

開発集落の水車（ミズグルマ）

守山 FS 研究員 藤井美穂

「野洲川は暴れ川で怖かったけど、野洲川のおかげで、開発（かいほつ）^[1]の田は用水には恵まれていた」（A 氏 男性 85 歳）。水が豊富な在所には、野洲川流域の他所にみられた池番^[2]や「水入れさん」^[3]がなく、各自が田に水を入れていた。開発集落には野洲川の湧水をひいた「イケ」（ため池、約 4m×6m）が 3 カ所あり、田の用水として利用されていた。また、田には 20 カ所のドッコイショ（自噴井戸 ニューズレター No.19 号参照）があり、田の水入れに使われた。

夏、好天が続き田が乾いてくると、A さんの家では、法竜川^[4]に面した田に水車（みずくるま）で、同川の水を汲み上げて田に入れた。開発では水車は戦前から 1970 年頃まで利用されていた。昔からの百姓や「まわりのええ家」（経済的に豊かな世帯）の約 20 戸^[5]が水車を所有しており、親戚同士が水車を貸し借りしていた。

水車は大阪で 17 世紀に発明された揚水用具である。開発では、1 軒あった指し物屋が 2 世代にわたって水車を作っていた。水車はマキの木製の羽根車^[6]と「タイコ」（鞆箱）からなり、双方を分離して水を入れる田まで一人で担いで行った。2 本の杭（約 4m）で川の中に固定したタイコの中に羽根車を設置する。杭を支えにして羽根を歩くように足で踏むと、羽根車は時計回りに後方に回転して、羽根が水をくみ上げ、タイコにつながるトユから水が田に注がれる。

水車の設置は川の幅と水深によって左右された。羽根車の直径より川幅が大きい川だけに使うことができる。川の水がタイコの 3 分の 1 以下にあると、羽根車は空回りして水をくみ上げることができない。開発の田の用水として利用された小川は、川幅が約 1.5m なので、直径 1.8m の水車が使えなかった。よって、川幅約 4m、水深約 1m の法竜川で主に水車が使われた。水車は使用した後、家に担いで帰った。水をよくひく田では頻りに水車を使うため、日光から板を守るためにヒヨイ（ムシロで覆う）をして水車を田に置いておいた。戦後、A さんは 22 歳頃から水車を踏んでいたが、手の回らん（人手が足りない）家は、高等科（13、14 歳）の時分から水車を踏んでいたという。

「羽根にパツとのもつて、手でもつ杭と同じ位置に足を置くと水車はとまってる。水車は疲れたな。1 時間

も踏んでおられへん。おなごさん（女性）が羽根にのって、2、3 回踏むと、後ろにふんぞり返って法竜川にドボンと落ちとったな」（A さん）。

一方、水車は「アラシ」にたまった水をかい出すのにも使われた。アラシとは、田植えの時期に田の一面に作られた畑地のことである。アラシのハザコ（畝と畝の間の溝）は深く、雨が多いと水が約 1m たまるので、水車を使って隣接している田に水をかい出していた。

1970 年頃からバーチカルポンプを利用し、法竜川やイケの水を組み上げて水路に流すようになり、次第に水車が使われなくなった。続いて、1961 年から始まった土地改良事業により、開発集落に地下水をポンプアップする自動ポンプが 4 つ置かれた。さらに、1972 年から開始された「琵琶湖総合開発事業」により、4 つのポンプが設置された。現在、開発集落には 8 つのポンプがあるが、4 つのポンプを稼働させて、田の用水をまかなっている。



水車：集落の小屋にあった羽根車。
直径 2.4m、羽根板は 15 枚。

[1] 滋賀県守山市洲本町字開発

[2] 旱魃になると堀池から水路に水を汲み出していた。2 人 1 組で、桶を縄で縛って両側から引っ張り、呼吸を合わせて池の水をくみ出した。地下水を吸い上げるポンプが設置されると、池番はポンプの見張り役になった。ポンプが自動運転になると池番はなくなった（播磨田編集委員会 67-68）。『条理のむら 播磨田町誌』播磨田町編集委員会 2000

[3] 田植えの時期から田に公平に水を分配する責任を村から委託されていた。毎日、担当区域を巡回して給水の管理をした。

[4] 淀川水系一級河川であり、守山市を流れる。洲本町を北西に流れて琵琶湖に注ぐ。

[5] 戦前から 1970 年頃まで、開発集落の全戸数は約 85 戸だった。

[6] 羽根車の心棒はケヤキで作られていた。

余呉鷺見の焼畑 (2)

朽木 FS 黒田末寿

焼畑の作業手順・作り廻し

春焼はしなかった。山が茶色で落ち葉の炎がわからず、知らぬ間に広がって、尾根の向こうも燃えてしまう危険があるからだ。夏だと燃えても尾根で止まる。大きな山火事はなかったし、少々燃えても騒ぎにならなかった。

8月のかかりに草刈り・伐採。カブラ用(約1a)は半日、ソバ用(約10a)は3、4日かかった。上と横を1.5mほど刈り下げ、火入れ前にさらに地面を畑側に掻いて防火帯にする。焼畑で儀礼めいたことはない。盆の間に家族か一人で天候により朝か夕方方に火入れした。火付けは上方風下から。木の燃え残りは集めて「コツヤキ」する。翌日に種蒔きしてからヒラグワ(=唐鋏)で鋏打ち(永井さんは鋏打ち後、種蒔き)。

火入れは最初だけ。1年目は除草なし。2年目除草は1度。よい土地では4年できた。

・ソバ→ヒエ/アワ(6~7月に植えた)→アズキ(→アズキ/エイ=エゴマ)

・カブラ→アズキ→アズキ→アズキ(→エイ)

ソババタケはだいたい3年で放棄。3年目にサツマイモやサトイモを植えることもあった。アワとヒエはS30年頃まで作った。カブラバタケは4年使うことが多く、さらにエイを植えることがあった。その後はアラス(=藪に戻す)。

鷺見カブラ

鷺見のカブラは赤く、何かの拍子で倒れて転げるほど丸くて根が短い。今の山カブラのように根が長くなったものは皮が固くなった。茎の下部も赤く、葉は固くて毛があり短くて散開状(西洋系の特徴)。水平に切ると中は白で芯側に赤い斑点が多くあり、漬ると全部赤に染まった。シャキッとした歯ごたえで甘みがあり、美味かった。

間引きは1度。それ以上やるとカブラを痛める。11月中旬までに収穫、半月日干しで糠漬けに。小さいものは厚めに切り、米酢と醤油にスルメか塩昆布で漬けた。肥やしをやると育たない。休耕地に火入れして作ったが、焼畑のものほど美味くなかった。余呉に移住後、畑で作るといいのができず、2年で交雑して白菜のようになってたりして元の形がなくなってしまった。採種用にはカブラの下1/4ほどを切って植え直した。

ソバとエゴマ

焼畑のソバは美味しかった。鷺見のソバは春蒔きしても実がならない。実は小さく尖りが少なくて丸みがあった。ソバも今はなくなった。エゴマは山菜の和え物に合う。5、6平方メートルもあれば、2升は取れたが、年に1升もあれば十分だった。

「アラス」と「ハダレ」

久保さんの話には、火に対する自信とおおらかさがあった。もうひとつ考えさせられたのは、畑を「アラス=荒らす」ことのとらえ方である。農家で荒れた農地の話が出ると、あきらめや悲しさが漂う。しかし焼畑の聞き取りでは、アラスにそんな雰囲気は伴わない。それもそのはずで、土から見ればもともと疲弊し荒れた状態は耕作終期であり、それをアラス=藪やカヤ場にもどすことは、土を回復させ「アラ(新)畑」の候補地として再生(=アラタニス)させることだからだ。(ちなみに橘(1995)は、白山の焼畑用語「ムツシ」はもどす意味の「ムズス」(つまり自然に戻す)から来た可能性を示唆している。)

こう考えると、余呉の焼畑用語「ハダレ」の意味もよくわかる。「畑荒れ」が語源かと思えるハダレとは、久保さんによれば、アレ地、とくに桑畑をアラシタところで焼畑の候補地である。農民の眼には荒地でも、土や焼畑の観点からすると新畑の適地なのだ。



昨年の火入れ前の焼畑(中河内:鈴木怜治)。
笹原のアレ地だった。今年は左手の藪を焼く。

お知らせ

余呉の焼畑作業の予定が決まりました。みなさまの参加をお待ちしています。作業はいずれも9~10時に始まります。

詳しくは本号4頁「催し物のご案内」をご覧ください。

催しのご案内

■第37回 定例研究会

1. 日時：平成23年7月21日(木) 16:00~19:00
2. 場所：守山FS (滋賀県守山市梅田町12-32)
3. 発表：

- ① Ms. Myint Myat Moe(ミンツ・ミヤット・モエ)、
ミャンマー、Yezin(イエジン)農業大学大学院生、
「ミャンマー中央平原における犁先作り農村向上の実態と可能性」
- ② Mr. Yezer (イエゼー)
ブータン国立大学シェルブツェ・コレッジ地理学科科長
「ブータンの農村開発」
- ③ Mr. Somphanh PASOUVANG(ソンパーン・パスワン)
ラオス国立大学農学部副学部長
「ラオス国立大学農学部における農村開発教育と実践」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
(担当:矢嶋 yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

ラオス活動報告6

一農学部学生ボランティア・カシコンアサー 生存基盤科学研究ユニット研究員 矢嶋吉司

これまで、ラオス国立大学農学部の先生とともに進めてきた村での活動、特に民俗文化資料館の建設を中心に報告してきましたが、文化資料館が完成し、その活用や伝統文化の保存を進めるにあたり、最近では農学部の学生たちが応援してくれる機会が増えました。学生は、先生の教え子に加え、ボランティアグループのメンバーたちです。ラオスでは、学生の自主的な活動がほとんどないと聞いていたので、興味がわき、グループについて話を聞きました。

グループの名称は、カシコンアサ(Kasikone Asa)といい、ラオ語で農業開発ボランティア(Development Volunteer of Agriculture)を意味します。2005年、林学部のボランティアグループの働きかけを受け、一人の女子学生が中心となり、農学部学生課の先生に相談、助言を受けて結成されました。自分たちでできる何か役立つことをしたいというのが動機でした。当時、相談を受けた先生は、農学部にも所属する正式な組織にすると様々な規制があり学外での活動に支障が出るかもしれないということで、学生たちの組織にしたと言っていました。

2011年6月のメンバー数は1年生から4年生までの48名。5年生に進級する際、卒業研究など学業が忙しくなり退会します。

新しいメンバーの勧誘は、8月末から9月の入学式の頃に、新入生にチラシを配ります。入会希望者には、入会願とともに、各自の特技や経験(例えば、歌・踊り・楽器演奏、野菜栽培など)を記入した質問票を提出してもらいます。そうして仮メンバーとして活動が



写真(パーシーの儀式)

2011年1月3日、農学部で行われたカシコンアサの創立記念祭。当日、サワナケット大学からカシコンアサの創始者も招待され出席した。

■夏、火入れ!余呉へ《くらしの森》づくり2011

【場所】

- 1) 滋賀県長浜市余呉町中河内の林野
- 2) 滋賀県長浜市余呉町「ウッドィパル余呉」赤子山の草地

【予定】*天候により日程が動く可能性があります。

伐開：7月2日(土) 中河内、7月21日(木) 赤子山
火入れ・播種：8月19日(金) 中河内、8月21日(日) 赤子山
間引き：9月初旬~下旬中河内、赤子山
収穫：10月中旬~11月中旬 中河内、赤子山

*参加を希望される方は、実施日の2日前までにご連絡ください。

*参加費：昼食代 500~700円(地元のお弁当です)

保険代 500円(伐開、火入れ)

交流会 2000円(火入れ、収穫祭)

■講師 永井邦太郎さん(摺墨山菜生産加工組合)

■集合場所、時刻や持ち物など詳細についてはお問い合わせください。

■連絡・問合せ先:火野山ひろば hinoyamahiroba@yahoo.co.jp

始まります。毎年1月3日にはカシコンアサ創立記念の行事が行われ、継続して活動に参加してきた仮メンバーにグループのユニフォームが与えられ、正式メンバーとして認められます。

リーダー1名(企画・渉外担当)、副リーダー3名(事務、広報、事業をそれぞれ担当)がおかれ、この4名の合意がなければ、予算や会計の執行ができない仕組みとなっています。

主な活動は、月2回行うキャンパスやその周辺の清掃活動、農学部関係者の冠婚葬祭や農学部行事・祝典の会場設営などの手伝いなどです。学外では、農学部ちかくの小学校を中心に、子供たちへのお話しや読書、植樹などの活動をしています。メンバーが自分たちで地域の問題(小学校が対象)を探し、農学部の担当の先生から助言を受けて企画します。先生の承認の後、リーダーが計画書を作成し、活動資金を得るため、民間会社や援助機関、NGOなどに申請しています。これまでビール会社やNGOなどの活動資金が得られているとのことです。

同じような活動は、現在、ルアンパバン市のスパナボン大学、サワナケット大学でも行われており、これらの組織とは毎年相互に訪問し交流しています。カシコンアサの創始者がスパナボン大学に就職、その後サワナケット大学に転勤しましたが、それぞれの大学で学生たちに働きかけ、学生のボランティアグループが結成されました。

以上のように、とても堅実に活動していることがうかがえました。現在、彼らと協働して実施する伝統文化保存プログラムの計画を進めています。

2010年5月2日、農学部で開催されたダチャンパ・ドンバン両村の子供たちによる農村伝統文化保存イベント。伝統文化の保存に取り組むNGO(PADETC)の助言を受け、カシコンアサが歌や踊りを指導した。(写真:カシコンアサ)

